

ご召喚はテニスプレイヤーですか？

榎田 健也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

注意 改稿しくります。

「木組みの家と石畳の街」で突如起こった聖杯戦争。聖杯は、住人らの運命を狂わせていく。

そんな中聖杯は、あるサーヴァントを抑止力として召喚した。熱き心を持つ、テニスプレイヤーの風貌をしたサーヴァントを。

登場人物紹介（だんだん増えていきます）

梅斗

本作の主人公。自身の記憶を無くしている。詳しくは「ご注文は記憶ですか？」まで

アーチャー

本編より先にほぼ真名がばれた可哀想なサーヴァント。超熱血。

ココア

梅斗のバイトの先輩。梅斗に片思いされている。

セイバー

二刀流の女侍。真名「宮本武蔵」。ココアのサーヴァント。

攻 遯
防 遁

目 次

4

1

邂逅

深夜の公園で二本の“ラケット”と二本の“刀”がぶつかり合う。どちらかが欠ける、という事もなく、均衡を保っている……二本の“ラケット”と二本の“刀”が。

「ちいッー！」

お互い体力を消耗する打ち合いに痺れを切らした剣士のサーヴァントが距離を取るために上空に跳び、斬撃を飛ばす。

「斬り返せるかッー！」

二本の刀を交差させて十字型の斬撃は片方のサーヴァントに飛んでいく。赤いジャージのような衣服を纏いテニスラケットを両手に持つサーヴァントが左手のラケットを手放すとそのラケットは消え、右手のラケットを両手でしっかりと握ると――

その斬撃を打ち返した。

「ぐっ……！」

渾身の斬撃を返され、受け止めようとしても斬撃の威力が倍近くまで増大している……剣士としてはかなりの屈辱だ。

「なんのっー！」

斬撃を打ち込んだ後に着地をして、動きを止め相手の様子を伺っていたためにこちらに斬撃を返せた……なら、斬撃を打ち込んだ直後両脇から迂回して近づけば、斬撃を防ぐもしくは跳ね返したとしても返された斬撃を避ければ近距離戦に持ち込み隙を突ける。いくら返されたとしても、先程打ち込んだ渾身の斬撃を返すのも少しの隙があった。その隙を突く方法があればかなりのアドバンテージになる。

「ふっー！」

再び地面を踏み込んで上空に跳び、斬撃を飛ばした剣士のサーヴァント。着地した瞬間その斬撃が通った場所を避けながら右側に回り

真つすぐに飛んできた斬撃を慌てて受け止めた。一つだけわかるのは、先程の作戦は通用しないという事だけだ。

「それならッー！」

威力が倍近くになった自らの斬撃を二本の刀で霧散させながら距離を詰め斬り込む。

「ぐぬっ」

ラケットをいつの間にか二本に戻していたテニスプレイヤーのような風貌のサーヴァントから声が漏れた。どうやら跳ね返すのにも幾分か体力を消耗するらしい。

「そこオー」「なんのツ！」

再び近距離でのぶつかり合いが始まった。

「ウオオオオオオ!!」

◇

一方その頃、公園付近の某所。

「はあ……はあ……」

結構な距離を走りある人物を探す男。彼はテニスプレイヤーのような風貌のサーヴァントのマスターであり、名を梅斗という。彼は記憶喪失で自身についての記憶がなく、住み込みで働いている喫茶店のマスターに名前は付けて貰った。

「りい……先ばあ……はあ……考案のお……メニューを毎日……体力にはあ……ぜえ……（特別意識：リゼ先輩考案のメニューを毎日やってるから体力には自信があつただけどなあ）」

疲れたのかその場で膝に手を突き地面に息を吐く男。誰かが見れば下を向いて息を荒くしているという警察案件ではあるが、残念ながらこの街は深夜に外出する人間はごく稀だ。残念ってなんだよ。

「ん……う？ あれ……う？」

息を少しは整えて前を向くと、そこに知り合いがいた。人によって行動は異なるだろうが、彼は心配と好奇心に動かされ、話しかける事に決めた。

「どうしたんですか？ こんな夜遅くに」

本当にこの街は、深夜に外出する人間は本当に稀だ、心配もする。

……その知り合いが、女子高生だったのならなおさらだ。

「あ、梅斗くん」

彼は、てつきり彼女が「眠れないから夜の散歩してたの」とでも言い訳をするのかと思っていた。しかし、彼女は梅斗の肝を凍らせた。

「あのラケットのサーヴアント、君の?」「っ!」

思わず懐に忍ばせておいた折り畳み式ナイフを構える。その台詞は、彼が探していた――敵対していた人物が言うべき台詞だった。

「私、セイバーのマスターなの。とりあえず、お話しよ?」

バイトの先輩で、想い人でもある彼女の台詞であるべきでは無かったのだ。

攻防

俺がアーチャーと出会ったのは、三日前。その日まで俺は、記憶喪失でありながらも喫茶店で住み込みとして働き、少女たちと親交を深めてきたのだが、そんな日常は崩壊した。夜の散歩の途中で突如目の前にジャージ姿で現れたのである。

「ねえねえ、君んちってどんな家？」

完全にやばい奴だったので逃げた。すぐ捕まった。

「はっ？　ちやんと見えよ!!」

そう怒鳴られて胸ぐらを掴まれた瞬間、頭の中に聖杯戦争についての知識が頭の中に入りこんできた。アーチャー曰く、似たようなことが先ほど起こり現代についての知識を得て、何故か俺に引き寄せられたとか。

「つまり僕と君は——」

「聖杯戦争の抑止力……?」

アーチャーと俺が聖杯に与えられた命令、それが「契約を結び、イレギュラーな開幕となってしまう聖杯戦争の抑止力として、聖杯を手に入れようとするマスターたちと戦い品定めをせよ」だった。アーチャーは聖杯に召喚されたものとして従うらしいが——

俺がその命令を果たす義理など全くない。そこで俺は、自分の目的の為に聖杯戦争に参加するマスターを全員倒すことにしたのだった。

自分の失われた記憶を、取り戻すために。

「サーヴァントとマスターは契約をするように『因果』で繋がれていて、それぞれ役目があるらしいの。今回の聖杯戦争は、特にイレギュラーらしくて、魔術回路が少しでも機能していればサーヴァントとの契約によって魔力と令呪が与えられる。今回の私の役目は『生存者』、要するにただのマスターだけど関係ない。私は生き残って勝って……私の望みを叶える」

何故かココア先輩と一緒に公園のベンチに座ってサーヴァントの戦いを観戦している。本当に何故だろう。前とは違う意味で心臓が

高鳴っている。

「本当に、どうしてこうなった……」

「そう言いながらナイフを喉に近付けてくるのはやめてくれないかな？ 私自身、誰も殺しちゃうつもりはないよ？」

「座る条件がそれでしよう、先輩」

ナイフを突きつけていいから座って話したい、と言ったのはココア先輩の方だ。俺はそれを承諾しただけだ。

「今はバイト中だから先輩じゃないよ？」

ああ……そうだったな。バイト以外は友達だって言われたな、ココア。

「ああ、今のお前は敵だ。俺は『抑止力』として聖杯戦争のマスターを全員倒す。手段なんて扱ばないさ」

「抑止力って何だろう……？」

「とにかく……俺は負けられないってことだ」

右手のナイフを思わずきつく握りしめた。正直、これ以上は動かせない殺せない。ただのハツタリである。

「私だって、そうだよ。だから……『第五勢』！」

「きえいー！」「はッ」「ふっ！」「うオオ！」

距離を詰めてラケットと剣をぶつけ合い、距離を空けて打たれた魔弾を剣で両断し、距離を詰めて互いの攻撃を避け、距離を空けて放たれた斬撃をラケットで防ぎ跳ね返す。

そんな均衡状態の中、先に動いたのはアーチャーだった。

「しゅうううう……ぞうツツ!!」

先程までテニスボールサイズだった魔弾が倍近くに増大しており、それを持ち前の腕力でラケットにぶつけ打ち込むと、分裂した。

セイバーが持つ刀は二振、アーチャーが打った魔弾は十発。到底、防御と回避はほぼ不可能。

「——『第五勢』！」

ココアが叫ぶと同時に、セイバーを謎の光が包みこむ。

「むっ、唐突に閃いた！……うおおおおお！」

刀が増えた——としか見えない捌きにより、魔弾を全て斬り割り無効化した。

「ふっ！」

「がッ！」

そしてすかさず、無数の斬撃をアーチャーにぶつけた。

「アーチャー！」

思わず梅斗が叫ぶ。

「梅斗くんごめんね、私……勝たないといけないから。……『天眼』！

令呪『宝具開放』！」

サーヴァントの能力を上げ、かつ令呪による宝具開放。避けられない

——梅斗はそう思った。

「さて、どうやって避けられればいいんだよ、これ」

「ちよつと難しいよ。こういつちやなんだけど、諦めるしか……」

——諦める？ それもいいかもしれない。聖杯戦争には負けるが、負けても俺が死ぬわけではない。だが……

「あいつと約束したんだよ……『諦めんなよ！』って、だから俺は——」
アーチャーを、セイバーと同様に光に包まれる——炎のような光に。

さらに、それと同時にアーチャーを中心に地面に炎が広がっていく。

スキル「諦めんなよ！」を梅斗は無意識に発動させていた。

防御力が上がるわけでもない、回避が出来るわけでもない、どんな攻撃も無効化する盾を構えるわけでもない。ただ、致命傷を受けても、霊核を木端微塵にするほど宝具での攻撃を受けても——

一度だけ、立ち上がることができる。

身体が鋼のようにならなくとも、闘志は周囲に広がる炎のように。

「来いッ！」

梅斗とアーチャーが同時に叫ぶ。

「その覚悟、感服いたした……我が真名『宮本武蔵』！ 南無。天満大、自在天神。剣氣にて、その氣勢を断つ！ 行くぞ、剣豪抜刀……『六

道五輪・俱利伽羅天象』！」

庄——オーラによつて仁王が背後に浮かぶ。業ですら一刀両断する一撃が、アーチャーを襲つた。